CLOSE-UP **Interview**

# 岡田珠江 教育学部准教授

## 言葉にできない子どもたちの心を見つめ、課題の解決を支えたい。

三重大学教育学部附属教育実践総合センターでは、心理相談室を設置し、さまざまな教育相談に応じている。その部屋で相談者をあたたかく出迎えているのが、臨床心理士でもある岡田准教授だ。「子どもたちに対し何ができるか」という想いを胸に、描画や創作を用いたセラピーを通じて、悩みや課題解決のサポートにあたってきた。そこには常に子どもたちに寄り添う、変わらない姿勢がある。

リラックスした状態で思い浮かんだイメージを描いてもらうイメージ療法。

箱の中におもちゃなどを自由に並べる箱庭療法も取り入れている。

### 子どもの支援をライフワークとして

「模索を続けた大学時代」そう振り返るのは、教育学部附属教育実践総合センターで臨床心理士としても活躍する岡田珠江准教授だ。子ども時代から人への興味関心が強く、心理士を目指し児童心理学を学ぶ大学へ。理論だけでなく、学内のカウンセリングセンターが開く勉強会やワークショップ、特別支援学校での実習に自ら参加し、体験を通して学びを重ねた。しかし、「勉強すればするほど、これは大変な仕事。私にできるのか」と疑念をもち、職業選択は一時保留。まずは納得いくまで勉強しようと研修に邁進する日々の中で、人生観や子どもを主体とした支援法など、自分なりのスタイルを徐々に確立していく。そして、やはり子どもの支援を追求したいと大学院へ。院生時代から教育相談員の仕事を始め、学業と仕事の両立は決して楽ではなかったが、専門家を目指して更なる模索が始まる。

### 相談業務を重視し、常に現場へ

「大人がしたり顔で特別なトレーニングをするのではなく、もともと子どもが持っている力、その子らしさが自然に現れるように手助けする、触媒のような仕事ができれば」。そんな目標を抱いて相談員の仕事を始めたが、実際の現場では「本当にこの応対でよかったのか」と面接記録を振り返っては悩む日々。心理療法の研究所や他大学の講義でも学び、できる限りの研修を重ねつつも、やはり知識は大事だが、それだけでは実践はできない。「現場では目の前にいる子どもや保護者は待ってくれません。どのように言動を受けとめて、どのように応えるのか、瞬時の判断が求められるわけです。結局『今、ここで』自分で感じ、考えて、判断することが求められる。実はそこに臨床の知があるということに気づきました」。実践の中で身をもって知った臨床の知の重要性。大学の研究者になってからもスクールカウンセラーとして公立学校へ出向くなど、相談活動を大切にしている准教授の原点はここにある。

### 子どもたちに教わったアートセラピー

三重大学に着任後も、さまざまなクライエント（相談者）と向き合ってきた准教授。相談活動の中で注目したのがアートセラピーだ。「子どもと遊びながら話をするんですが、そのときに何をしよう？と聞くと、多くの子どもが絵を描きたいと言う。元来私も好きですが、言葉ではうまく語れない心情を無理なくいろんな形で表現できる。これはR.ロジャーズの来談者中心療法における言葉に代わる表現であり、とても大事なことだと感じました」。准教授のアートセラピーは、実践の中で出会った子どもたちから教わったもの。だからこそ当時、日本では心理テストとして用いられることが主流だった描画法の扱いに違和感を覚えた。「支援の手立てとしてもっとアートを活用したい」。そう考えていたとき、国際学会で出会ったのがアートセラピストとして活躍するドイツの実践的研究者だった。准教授は、程なくドイツに留学する機会を得た。

### ドイツ留学を経て得た確信

ドイツ留学は「人生観が変わった」と言えるほど、准教授にとって大きなターニングポイントとなった。子どものグループにセラピストとして参加したり、自身も教育分析としてセラピーを受けたりするなど、現地で精神分析理論を背景にしたアートを用いたイメージ療法を学んだ。やがて准教授は「その人のイメージする世界を自然な形で喚起して、それを自由に描いてもらう中で、不安や願望など多くのものが表現される」と実感する。多くを語らなくても、自分の心の世界を俯瞰でき、課題を浮き彫りにできるという点。さらに課題の解決もイメージの中で練習でき、現実の世界にも変化を与えられるという点。そんなアートを用いたイメージ療法の特長は、コミュニケーションが不得手な子どもたちにとって非常に有効だ。アートへの信頼感を高めた准教授は、ドイツから帰国。心理相談の中で描画などの創作活動をするスタイルを確立し、相談に訪れる対象者に合わせて、幅広くその手法を活用している。

### 常に子どもたちとともに

現在、心理相談室にやってくるのは、主に学校教育関係者である。所属する教育実践総合センターで、現職の学校教員を対象にした研修を行ったり、内地留学生を受け入れたりしているためだ。学校現場が抱えるさまざまな課題の解決は容易ではないが「大切なのは、それぞれの立場で今、子どものために何ができるかを一緒に考え、連携すること」と語る。

講義や研究、心理相談室での活動など多忙な日々を送る准教授だが、休日には山歩きやダイビングなどで三重の自然を満喫。「何でもやりたがるので子どものようだ、と言われてしまう」と笑うが、旺盛な好奇心こそ今日まで走り続けてきた准教授の原動力だ。そして、准教授が今後の課題として見つめているのは、外国籍の子どもたちに対する心理的支援。「そのような子どもたちにもアートを用いた心理的支援が役立つのではないか」。常に子どもたちとともにあること、声にならない想いを通訳、時には代弁すること。その強い信念とともに准教授の快走は続いていく。

岡田珠江 おかだたまえ
教育学部准教授
臨床心理士、芸術療法士
専門分野は、臨床心理学

**アートセラピーの道具**
クレヨンや絵具などを机の上に並べて、相談者を迎える。

**ドイツ留学時代**
アートセラピーのワークショップ。時には日に何枚も絵を描いた。

**学生時代の実践の場**
大学時代、特別支援学校に通いつめ、卒業論文を書かせてもらった。

**趣味の山歩き**
三重県の御在所岳。趣味を通じてたくさんの仲間ができた。

**翻訳書を出版**
5年がかりで翻訳した専門書。表紙イラストは自身の絵。